OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	最もらしからぬ旧帝大 : 大阪大学発展の系譜
Author(s)	斎藤, 諦淳
Citation	大阪大学史紀要. 1983, 3, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12060
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

最もらしからぬ旧帝大

―大阪大学発展の系譜―

斎藤諦淳

目次

はじめに
緒方洪庵―旧帝大らしからぬさの先達
適塾よりも懐徳堂―鶫学問の系譜
総合大学への発展―法文系、歯学部の創設
研究機能の拡大―蛋白質研究所の創設
新機軸の学部―基礎工学部、人間科学部、
　医療技術短期大学部の創設
発展の指数―規模の拡大

はじめに

戦前の七つの帝国大学を母体とするいわゆる旧帝大には、大学の中でも学術研究の中核的な機関としておのずから伝統的、高踏的な性格がある。ところが、これら旧帝大の中にあって、大阪大学は相当趣きを異にする。戦後の新制大阪大学の発展の跡を具体的に追ってみてそれが明らかになるが、要するに大阪の風土、気性そのままに驚く程現実主義的であり革新的である。この意味で最もそれらしからぬ旧帝大なのである。そして、この特質は、大阪大学の源流といわれる適塾及び懐徳堂の伝統そのものでもある。

この大学は、その旧帝大らしからぬさのために非常な発展をしてきた。格式ばらない現実性と先見性で新機軸を次々と打ち出し、それを実現してきた活力あふれる大学であった。

今回、自ら大阪大学を卒業し、その後、たまたま二十五年余にわたって文教行政に関与し、いわば内外から大阪大学を見つめてきた立場で、多少の独断も加えながら、その最も「らしからぬ旧帝大」の発展の軌跡をみて行きたい。

緒方洪庵―旧帝大らしからぬさの先達

大学には伝統や建学の精神の拠りどころが必要で、その拠るべき源

流をもっていることは幸せである。

大阪大学の場合、その源流は適塾に求められている。これは、大阪帝国大学が昭和六年に発足した時、大阪医科大学を継いだ医学部を中心にし、理学部を新設してこれを加えて創設がなされたように、医学部が大阪大学の中で最も伝統ある学部であること、その医学部の前身が幾多の変遷を経てはいるけれどこの適塾であることによる。その適塾は、今更いうまでもないが、幕末における洋学研究の第一人者と仰がれた緒方洪庵の開いた塾で、その門下生から明治維新の原動力ともいうべき数々の人材を輩出したのであった。更にいえば、一方では東京大学医学部は洪庵及び塾生の長與専斎等によって開かれたものであるし、又一方ではその塾長をつとめた福沢諭吉が慶応義塾大学の創始者であるため、いわば適塾が日本の官立、私立大学の源流ともいえる存在であり、したがって大阪大学の関係者は凡そ大学一般の精神的拠りどころと、自分の大学の先駆とをオーバーラップさせて適塾を源流と思い、愛惜することとなるのである。

適塾から大阪大学医学部に至るまでは度重なる改廃をくりかえし、その間、組織的にも多少の断絶はあるが、適塾が大阪大学の源流であるというのはむしろその学風なり、それを支える大阪の精神的土壌においてである。たとえば大坂における蘭学の発展について梅溪昇氏が

「蘭学が大坂に根を下ろしたことは、この地の経済の発達にともない、町人の間に数理観念の普及したことが蘭学の合理性を理解し受容する素地となったと考えられる。（中略）普及の実情についてみれば、保守的で形式を重んじる武士階級よりは、実質を尊重する町人社会に適合するものがあった。従って、わが国経済界の中心に位していた大坂に蘭学の発達する条件が存在したのである。」（適塾記念会『緒方洪庵と適塾』）

と述べているのを見たりすると、当時の蘭学の事でなく、現在の大阪大学に固有の学風を支える地域的特性にそのままあてはまる。背景となる土地柄に反応しながら学風は継続されるのであり、又そういう学風に合った人々が更に集まって伝統を拡大生産して行くのである。

洪庵は「安政六、七年のころ、英学の重要性をみとめ、優秀な塾生の一人に英語の学習を勧めていることがある。その理由はオランダよりも強力な英米などの列強と新しく接触するに至って蘭学の使命は一応その限界に達し、やがて英学がこれに代ることを見通していたのである。ここに事態の本質を見きわめる卓見と常に最新知識を求めようとする精神がよく示されている。」（前掲書）

といわれている。これなども、職務上付きあう他の大学に比べ、大阪大学の学長や学部長にそのままあてはまる顕著な性格である。適塾及び洪庵について知識があるわけではないが、ものごとにとらわれないで新しい方向にどんどん進んで行く大阪大学人の性向をみていると、殆ど確信に近い感触で洪庵の思想や思考のパターンが理解できる。

権勢や格式ばったことを嫌う洪庵は幕府奥医師、すなわち将軍の侍医という栄誉に召されるが、これを不本意とし「世にいう有難迷惑なるもの」としながら幕府勤めに赴いたという。そして江戸へ出てわずか十か月で急死する。「己の適するところを適」として適々斎と名のった自主独立精神の旺盛な洪庵は、権威主義の江戸へ向うのが余程進

まなかったのであろう。大阪を出る際、

よるべぞとおもひしものをなにはがた
あしのかりねとなりにけるかな

と詠んだという（前掲書）。大阪、適塾からはなれ、水のあわない江戸に出向く洪庵の気持が切々と伝わってくる。

凡そ旧帝大特有の権威主義とは無縁で、格式ばらず進取の気性に富む大阪大学の性格は、洪庵に代表される適塾の群像に重なるのである。適塾と洪庵こそ、旧帝大らしからぬ大阪大学の源流でありその先達の最たるものであった。

史蹟「緒方洪庵旧宅及塾」は、昭和十七年、ゆかりの深い大阪大学に寄附された。その後、都会の真中にもかかわらず奇跡的な幸運というべきか、戦災をもまぬがれ、見学者に生々しい迫力でその歴史を語ってくれる。今日、大阪大学にとってその源流としての適塾の存在は、とにかく大きな意味をもっている。

適塾よりも懐徳堂——鵺学問の系譜

適塾を大阪大学の源流とすることには誰も異存はないが、他方、もう一つの大阪大学の源流として、享保九（一七二四）年に創設された懐徳堂を忘れてはならない。一般には無名であるが、大阪大学の関係者が貴重な研究をしていることを仄聞する。それから推量すると、現代の大阪大学の発展の思想的系譜は適塾以上に懐徳堂に源流をもっている。思想的系譜というのは町人の学問所としての性格であるが、その実態は作道洋太郎氏によって端的に指摘されている。

初代学主の三宅石庵等によって展開された学問は「陽明学を主としながらも封建朱子学や、京都の伊藤仁斎にはじまる古学などもとり入れ、諸説をあわせて折衷したものであったので『懐徳堂の鵺学問』と評されたことは有名である。」（「近世大阪町人学の系譜と特質」『大阪大学史紀要』第一号）

戦後、新制大阪大学になってから新しい学際領域等の学部を増設し発展する動向を見ていると、この町人的発想ともいうべき、諸説の折衷的な「懐徳堂の鵺学問」という特質が、大阪大学の学問的系譜といって間違いでない。

懐徳堂は、中井竹山、履軒兄弟の代の頃黄金時代を築き、江戸の昌平黌を凌ぐ勢いであったといわれたが、一四五年間の活動をおわり明治二（一八六九）年に廃止されたという。なお、その後明治四十三（一九一〇）年、懐徳堂記念会が組織され市民教化を行った。昭和二十四年、同会から図書が大阪大学文学部に贈られ、これを懐徳堂文庫として運用している。

懐徳堂の場合、明治二年に廃止されたままであったため、その後の大阪大学に人的な系列があるのでなく、又組織としても継承したものでもない。ただここで述べたいのは、直接の沿革的継続性より、懐徳堂を育てた土地柄やその思想的同質性のことである。伝統とはそういうものであると思う。

大学が建学の精神の系譜としてひきつぐものは必ずしも確実な継承を経なければならないものでなく、それよりもその大学の背景をなす

社会的土壌や、教官、学生が共有する思想的同一性が重要なのである。それが学風を形成して行くのである。ワセダマンの気風は明らかに慶応ボーイと異るが、これは、政府を追われ、学問の独立を主張した大隈重信の反官在野の精神を何らかの制度として継続したために培われたものではなさそうである。むしろ、学生が本当にワセダの学生になるのは、春の早慶戦を体験してからといわれるが、これが最も当っているのではないか。

神宮の森で応援歌を大声ではりあげ、勝っても敗けても新宿の町を肩くみあってねり歩いて早稲田精神は育って行く。その時、慶応のように福沢諭吉を呼びすてにすると顔をしかめるような幼稚舎上りのエリート層はいないし、大体が都会育ちの多い慶応にくらべた場合、東北や九州四国地方の出身者が多い。球場では、慶応の側にはめったに見かけない下町のおぢさん達が早稲田側のファン席には数が多い。勝利の美酒を女子学生と肩をくんで汲みかわすのも、慶応の場合はレストランといってもよいが、早稲田の場合は食堂といった方がぴったりする。多分、その女子学生の香水の香も、慶応の場合に比べうすい筈である。こうしてスマートな慶応ボーイに比べ、活力あふれるワセダマンが育って行くのであるが、いわば組織的な沿革が大学の伝統を育てるのでなく、学生の社会的背景や地域のかかわり、或いはOB、教員はては学生街の商人等まで含めた大学関係者の行動や雰囲気の中で伝統と学風は作りあげられるのである。

その意味で、懐徳堂と現在の大阪大学には明らかな継承の系譜はないが、いいかえれば懐徳堂を育てた土壌が、又同じような学風をもつ大阪大学を育てたというのが正確な分析であろう。

「懐徳堂では、四書(大学・中庸・論語・孟子)・五経(易経・詩経・書経・春秋・礼記)を教えたが、その解釈は折衷的で、そのためさきに述べたように「鵺学問」ともいわれた。首は朱子で、尾は陸(陸象山)、脚は王(王陽明)のようで、鳴く声は医に似ているといわれた。その医というのは、石庵が丸薬の「反魂丹」を市販し、病弱の子春楼の療養費に充てていたからである。石庵はまた『中庸』の解釈においてすぐれ、ひろく学んで、これを自由に批判し、かつ中正を得ることが自由討究の学問精神であることを明らかにした。こうしたところに懐徳堂の特質がうかがわれ、学問としての整合性よりも、その実践性を重視し、町人向けの教養的儒学を創造したところに大きな意義が認められる。その点、江戸幕府の学問所であった江戸湯島(はじめ上野忍ヶ岡)の昌平黌とは性格をいちじるしく異にしており、懐徳堂の学問は虚心担懐で、町人教育の本旨にそうものであった。」(作道前掲書)

今日の大阪大学の特質を考えながらこういう分析をみても、懐徳堂はかりに適塾に比べ制度的断絶があっても、更に大阪大学の立派な源流であるといってよいのである。

学風がそうであるばかりでなく、地元による大学の支援体制やそれの具体的現れともいう寄附等も、懐徳堂と大阪大学の場合はおどろく程類似している。享保九年に懐徳堂を設立した中心メンバーは「懐徳堂五同志」といわれる大阪町人たちで鴻池家三代当主の女婿にあたる鴻池屋又四郎をはじめ醤油醸造業者、両替商、貸家業を営む者達であったという。又、天明元(一七八一)年、懐徳堂修覆のため義金募集を

行った記録をみても白木屋彦太郎、鴻池宗太郎、播磨屋九郎兵衛等の名前が上っている。

他方、大阪帝国大学一覧を調べていると、次のような記録に出合ったが、天明元年より百四十年下っても同様の支援体制である。

元大阪医科大学基本金寄附者氏名

大正六年二月十九日ノ火災ニ依リ大学及病院ノ再築ト予科ノ拡張新築ノ必要ニ迫マラレ為メニ巨額ノ建築資金ヲ要シ一面亦大正七年ノ大学令ニ拠ル大学認定ニ関シ一定ノ基本金ヲ要スルニ至リタルヲ以テ大正七年ヨリ八年ニ亘リ普ク大阪市ノ有志ニ懇望シテ基本金ノ寄附ヲ乞ヒ即納或ハ年賦ニ依リテ約壱百万円ノ醵金ヲ集ムルコトヲ得之ヲ大学基本金トナシ病院建築費ニ一時繰入レタリ而シテ其ノ主ナル寄附者氏名左ノ如シ

(寄附金額)	(氏　名)	(寄附金額)	(氏　名)
拾万円	男爵　住友吉左衛門氏	拾万円	男爵　藤田平太郎氏（合名会社藤田組社長）
六万円	久原房之助氏	五万円	範田龍太郎氏
五万円	堀啓次郎氏（大阪商船会社社長）	参万円	男爵　鴻池善右衛門氏
参万円	岸本吉右衛門氏	弐万円	原田六郎氏
弐万円	日本生命保険株式会社	弐万円	山岡順太郎氏（株式会社大阪鉄工所取締役）

（以下略）

（『大阪帝国大学一覧』昭和十八年度）

なお明治五年に国立直轄になっていた大阪医学校が廃止され、適塾以来の伝統が消えかかったことがあるが、この時も大坂の財界人鴻池善右衛門、住友吉左衛門など有志三百名が醵金して明治六年に大阪府病院を開設し、後の医学部への学灯を維持したといわれている。地元が肝入りして支えるこれらの行動様式はすべて懐徳堂以来の伝統なのである。昭和六年に大阪帝国大学が設置された時も、創設関係予算が貴族院で紛糾し、二日間の会期延長を要したと伝えられているが、その理由は従来の帝国大学が国家目的に沿うものとしてその主導で創設されるのに対し、大阪の場合財政的に多くを地元公共団体等に依存する事が一つの問題になったといわれる。医学部にもいろんな寄附金が入っていたが、理学部創設の母体となった塩見理化学研究所も、大阪医学校卒業生塩見政次病没に際し私財百万円を大正五年に寄附したものであり、これがあったため理学部乃至大阪帝国大学が創設できたと伝えられる。

このように地元が経済的に援助するからこそ、その学問自体が地域に稗益することが要請されるのであり、又このことによって大学における教育、研究のあり方が大阪固有のあり方をもって発展して行くのである。その関係は次の叙述によく表れている。

「徳川時代の大阪商人は、誰からも援助を受けられないで、大名や幕府から御用金と上金で苦しめられながらも、成長して行って、幕府をおさえ、大名を経済的におさえた。その自信の根源は、大阪北浜三丁目にあった二つの大学（今流にいうと大学）であった。理工系と文科系の学校、すなわち緒方洪庵の『適塾』と、もう一つは『懐徳堂』であった。懐徳堂は大阪商人学の基礎づけを敢行した有名な学校である。中井竹山も、山片蟠桃もここでの人であった。私の家は代々冨子米屋助右衛門として北浜に住んだが、その東側が懐徳堂で、毎年銀五〇〇

夂以上を寄付した記録が残っている。」（冨子勝久「これからの大学経営」民主教育協会『現代の高等教育』二三九号）

適塾も緒方洪庵の思想にあらわれるように大阪的―大阪大学的特質をもっているが、大阪商人学を基礎づけした懐徳堂は、それ以上に旧帝大らしからぬ大阪大学の源流としてティピカルなのである。

このようなわけで大阪大学存在の仕方及び思想的源流としては、適塾よりも懐徳堂を更に重視すべきではなかろうか。作道洋太郎氏は懐徳堂学を復興し、近世大阪における学問の独自な性格を再検討し、大阪町人の行動原理ないし価値体系の形成過程を明らかにして行く必要を説く。それはまた「関西復権」の学問的指標を確立することにもなることを指摘する。本当にそうだと思う。関西のためにも、大阪大学のためにも大阪大学の思想的源流というべき懐徳堂の事績は更に評価し、研究されるべきであると思う。そのようにして大阪大学の歴史又はその学問的系譜が明らかになることは又わが国大学、学術のあり方及びその発展のためにも大きな貢献をすることにもなるのである。

総合大学への発展――法文系、歯学部の創設

昭和二十二年、大阪帝国大学は大阪大学となり、法文学部を設置して総合大学の実を備えた。つづいて昭和二十四年五月、国立学校設置法（法律第一五号）が公布され、文学部、法経学部、理学部、医学部、工学部の五学部からなる新制大学として出発した。法経学部は昭和二十八年八月に改組され、法学部と経済学部が設立された。総合大学にとって法学部が生れたことの意味は大きく、これでいわば一人前の大学になったといえる。

法学部での恩師熊谷開作氏による「大阪における法学教育事始」は法学部の存在意義について次のように述べている。

「法学部の欠けた大学とは、西洋の大学の事情をいくらか知っている者にとっては、きわめて奇異なことである。ヨーロッパでの最も古い大学としては、イタリアのサレルノとボローニャの両大学とパリ大学の三つがあげられるのがつねである。そのうち、サレルノが医科の単科大学であったのに対し、ともに一二世紀に成立したといわれるボローニャとパリの両大学は文芸、医学、神学とならんで法学の教育が行なわれた。そのうち、パリ大学では、一二一九年以後市民法の教育が禁じられ、教会法だけが教えられたが、ボローニャ大学は教会法とともに市民法を研究・教育する大学として名をはせ、ヨーロッパ各国から多くの学生を集めた。（中略）大阪には司法省法学校や大学南校にあたる国立の法学教育機関はながく設けられなかった。それは、医学をはじめとする理科系教育機関が早く設けられたのと対照的であった。（中略）文化の中心ならばその文化を研究し教育する部門が必要であり、商工都市ならばそれが進むべき方向やそこに生起する複雑な問題に対処しうる知識を養う経済や法律を研究する分野が必要なはずである。（後略）」（『大阪大学史紀要』第一号）

この所論は、大阪大学の歴史が医学乃至理工系に重点がおかれ、総合大学のあるべき理想像についての展望を欠き、法の論理を媒介とする権利と義務の体系的教育、研究を行う法学の分野が発展しなかった

ことを述べているのである。他方、法科万能の権威主義的な目で大学のあり方を眺める立場からも法学部の存在意義は重視される。

「昭和のはじめの帝国大学としては、東京、京都、東北、九州、北海道の五校があった。その後、植民地であった京城、台北に二校が置かれ、さらに大阪、名古屋にも開設された。このうち、大阪、名古屋の両帝国大学は、戦後に至るまで法学部もしくは法文学部を持っていなかったから、法学部をもつ帝国大学が帝国大学の中の帝国大学たる地位を得たのではないだろうか。」（教育社『官僚』）（注 北海道大学の場合も法文学部が設置されるのは昭和二十二年である。）

こういう立場から見れば大阪大学は、皮肉にも戦後、帝国大学の名称を廃止した正にその時にはじめて真の帝国大学の地位を得たことになる。

しかしながら、旧帝大の地位を確保するために必要不可欠の学部といわれる法学部にあっても、やはり大阪大学の場合は旧帝大らしからぬ色彩をもつ。卒業生の動向を見ても官吏養成の影はうすく、他学部同様民間中心型である。

「阪大法学部の例で卒業生の業種をみると、

官公庁（地方自治体、特殊法人を含む）	四四四（人）	一三（%）
司法関係	二三四	七
新聞・出版社等	七一	二
各種民間企業	二一七七	六一
大学・教育関係	一三三	四
その他	四八二	一四
計	三五四一	一〇〇

（昭和五十五年度大阪大学法学部同窓会名簿より）

となっている。もはや官吏養成や言論文化等法政固有のエリート人材を養成するのでなく、通常の学部と同様、サラリーマン又は市民養成の大衆の学部になったことが明らかである。」（斎藤諦淳「エリートの学部から大衆の学部へ」『法学教室』一九八〇、一二月）

他からは或種の期待があるかもしれないが、法学部にも権勢欲の旺盛な肩ひじを張ったエリート性はなく、やはり大阪町人的学部なのである。

格式と正統派を重んじる旧制帝大の系列からみれば、たえず現実的な企画を構想する大阪大学発展の特質は、その後の殆どすべての学部等の新設の跡に一層あきらかである。大半の部局は、旧制帝大的感覚から見ると新奇をてらうか、権威を失墜させるかの試みによって他の大学関係者や文部省を唖然とさせながら拡張してきたといっても誇張ではない。

その筆頭ともいうべきは昭和二十六年の歯学部の創設である。戦前のわが国の歯学教育機関は専門学校までであって、大学になるのは戦後である。当時の歯科医療の医学に比した地位からみても、大学関係者はその養成機関が専門学校から大学に昇格することに異和感をもっていたに違いない。それを事もあろうに旧帝大に設けるとはというのが正直な感覚であったろうと推察される。又、医学部から見れば歯科口腔外科は、大世帯の内科・外科等にくらべ、通常講座にすらなっていないクライネハッハ（小診療科）である。学部はもとより学科に昇格

させることすら考えも及ばない。

それにも拘らず、大阪大学では早々と終戦直後の昭和二十一年から歯学部設置を検討していたのである。

「大阪大学に歯学部設置の空気がかもし出されたのは終戦後のことであった。医学部教授会に、そのことが報告され、はじめて、その具体化の第一歩を踏んだのである。ときの総長八木秀次、さらに引続いて総長今村荒男を始め評議会・医学部長黒津敏行・医学部教授会に対する弓倉教授の真摯・熱心な働きかけにより、医学部歯科学教室を基礎として、大阪大学に歯学部の新設を文部省に申請する方向に進んだ。」そして昭和二十一年九月に医学部教授会及び学部長会議ならびに評議会に案件が上程され、同年度の追加予算に必要経費を要求することが決められたという（『大阪大学二十五年誌』）。

昭和二十一年では、私立東京歯科大学がその七月十九日に専門学校から大学になり、他方国立の東京医科歯科大学は同年八月二十七日に大学に昇格したばかりである。そして八木、今村総長のこの時期はまだ大阪帝国大学であるから、まぎれもなく帝国大学の中でいわば全く新参ものの歯学部をかかえこむ方針をかためたことになる。学問としての整合性よりも実践性を重視する懐徳堂の礎（いしずえ）学問については前に述べたが、何でも必要なら実現しようとする新学部創設の思想に懐徳堂以来の面目が躍如としている。

多分、国立大学の中でも白い目で見られ、又、財政の逼迫する戦後整備で余裕のない文部省でも冷遇された模様である。当時の担当課では財政的不如意のためその整備に当たって相当抵抗したときく。この間の大学側の事情は次のように述べられている。

「二十五年三月二十二日部局長、評議員合同会議において二十五年度から歯学科を置くことになっていたが、故障があり行悩みの状態となり、このことについて係官が上京折衝中である旨総長から報告がなされた。黒津医学部長は、たとい反対があるにしても、学生募集の公募後では今さら中止することは出来ないので、医学科と同時に、一次（二月二十五・六日）、二次（三月十八・九日）の入学試験を行い、歯学科を第二志望とするものでも成績上位の学生を少数入学させ、万一、歯学視学委員によって歯学科の設置を否決された場合には、それらの学生を医学科に吸収して責任をとるべく決意された。」（『大阪大学二十五年誌』）

結果的には昭和二十五年度中に歯学科が整備され、二十六年度に歯学部が設けられたのであるが、講座や病院の人的・物的整備は悪く、その後昭和四十七年から五年弱の間大学局医学教育課長として職務を執った時、東京医科歯科大学やその後設置された歯学部に比べ、大阪大学は教職員数等の措置状況は悪く、再三追加整備を図らなければならない状態であった。

大阪大学に設置され、その学部としてのステータスが確立されてから、東北、北海道、九州等の各旧帝大にも歯学部が置かれることになったが、その後時期を失した京都、名古屋の両大学は、激しい設置の要望にも拘らず実現を見なかった。これらの大学では、多分永久に歯学部の設置を見ることはないと思われる。東京大学では、今まで終始、その設置の話は出ていない。

研究機能の拡大——蛋白質研究所の創設

時系列的に見て、次の大阪大学の事績は、大学附置共同利用研究所としての蛋白質研究所の設置である。この研究所の設置は歯学部の場合程、新奇、異端の事業ではないが、赤堀四郎氏を中心とした大阪におけるこの分野の研究レベルの高さを基盤とし、大学内で研究活動を閉鎖的に行わず、全国に開放した共同研究推進のための新しい組織のあり方に柔軟に対応して設けられたものである。戦後の学術研究の進展や新しい研究用機器の開発、精度の向上或いは実験装置の大型化等による研究の高度化・精密化を背景として、装置の集中と全国の研究者の共同研究を促進するための場の設定が極めて重要になってきていた。文部省では、これらの要請をふまえて昭和二十八年、従来の国立大学附置研究所（狭義の附置研究所）のほかに、当該大学の研究者のほか、広く他の大学等の研究者にも共同して利用させるための国立大学附置共同利用研究所の制度の創設にふみきり、蛋白質研究所もいち早く名のり出たのである。この結果、東京大学の宇宙線、原子核、物性の各研究所及び京都大学の基礎物理学研究所についで、第五番目の大学附置共同利用研究所として設置されたのがこの研究所である。その後名古屋大学のプラズマ研究所等も設けられ、阪大自体も昭和四十七年に溶接工学研究所を設け、この種の研究所は現在十二になっている。東北大学では、名声の高い金属材料研究所を含め八つも研究所を持ち、研究所大学の異名をもつ程でありながら、まだ共同利用研究所はなく、北海道、九州の両大学にもない。

学界を含め、学術政策の方針が研究所の共同利用化の方向にあるため、このような研究所を附置することにより、おのずから教職員の整備や予算措置が行われ、要するに時流にのって発展が期せるのである。又、国内国外の研究者に門戸を開いた客員部門や外国人研究員の制度等がこういう研究所に優先して整備されるとともに、その研究所の性格上人の交流が盛んとなる。情報の交流も増え、研究は発展する。研究のアクティブィティは確実に上る。

東京工業大学慶伊富長氏によって内外の化学者の研究活動の調査と分析がなされたことがある。それによると、日本の化学者の研究活動は近年、世界のトップレベルに位置し、大学別では次のようである。

ケミカルアブストラクト掲載論文概数（一九七九年）

東大	二、三七六
京大	一、八六四
阪大	一、七一〇
カリフォルニア大・バークレー	一、六二五
東北大	一、五〇〇
ウィスコンシン大	一、四〇九
マサチューセッツ工大	一、二六〇
コーネル大	一、一八一

（以下略）

この数字は、米国で発行され国際的に定評のある化学学術誌「ケミカルアブストラクト誌」に収録された論文数を分析して比べたもので

ある。

同誌は、主要国に多数の調査員を置き、それぞれの国内の学術誌に発表された化学関係論文で世界的水準のものをピックアップして趣旨を紹介しているが、その紹介論文数を比較したものなのである。調査に若干の誤差はあるが、この数字は慶伊教授をはじめ、欧米各国の大学に出張したり国際会議にしばしば出席する多くの実感とも一致するという（日本経済新聞、昭和五十五年六月九日版）。

このような研究活動の旺盛さは、理工系の各学部の業績もあるが、同時に、いち早く設置された蛋白質研究所の活動に負うところが多い。なお、このほか、諸般の理由で研究所とはならなかったが、核物理研究センターも、全国共同施設として設置されている。

新機軸の学部――基礎工学部、人間科学部、医療技術短期大学部の創設

共同利用研究所は、同一の専門領域について人が交流するいわば人際研究組織であるが、つづいて昭和三十六年に設置を見た基礎工学部は、異る専門領域を一つにまとめようという学際組織の試みであった。学長時代にこの学部の創設に努力した正田建次郎氏は、丁度昭和二十九年に学長に就任され、昭和三十年にたまたま卒業生として卒業式に加わった者として、先生が送辞に述べられた言葉を記憶している。要するに、人間は理論だけでは駄目で、たとえば自動車のメカニズムを理論的に知って、運転できるというだけでは不十分である。具体的に部品や機械の構造や機能をマスターし、故障が起きても自らの手できちんと修理できる技術をともなっていなければ殆ど価値はない。君達もそういう技術の裏付けの伴った理論なり思想をもった人間として社会に巣立ちなさいという趣旨の話であった。理学や工学といった専門領域の枠にとらわれない、いかにもプラグマティックな大阪大学人らしい内容であるため、二十八年を経た今でも鮮明に覚えているのであるが、基礎工学部の創設はこの趣旨を実現したものである。銘板に書かれた次の言葉がこの考えをはっきり示している。

「科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発それにより人類の真の文化を創造する学部　一九七一年一一月　正田建次郎」

外部からもこの学部の創設は評価されている。朝日ジャーナルは昭和五十四年三月から継続ルポルタージュ「三〇〇万人の大学」をはじめ、第一番手に大阪大学をもってきている。そこでは、この基礎工学部の設置にふれて、次のように述べている。

「一九六一（昭和三十六）年、高度経済成長、科学技術ブームの申し子として、基礎工学部が誕生した。理と工、科学と技術を・なしで結んで、最新のディシプリン（専門的訓練）を身につけた科学技術者を社会の需要に応えて送り出すために設けられたものである。当時、どの大学も工学部の拡張を試みていた。だが、それが学部の新設という形で行われたのは、旧帝大では阪大が唯一である。」（朝日ジャーナル、一九七九、三、二十三日号）

その後、経済成長策や技術革新に関連して各大学工学部に講座増が相ついだが、そのため一つの学部としてマンモス化して動きがつかな

いところにきている。東京大学で二三学科一六七講座、京都大学では二三学科一六一講座である。大阪大学では工学部一八学科一一六講座、基礎工学部八学科五八講座におさまっている。学部がマンモス化すると、教授会といってもマイクをもって大声で意見を述べなければならない。自然、建前の大議論を展開するか、或いは意見を述べないで腹ふくるるところとなる。学科主任会議がこれにとって代ることになるが、それは学部内民主々義を疎外する。新しい発想で基礎工学部に拡張の道をとった大阪大学は賢明であったといえよう。

拡張の手段としての現実問題だけでなく、理念としても正田学長の主唱する科学と技術の融合を図るというのは卓見であり、近年急速に伸びてきた新しい科学技術の発展をになう人材の養成にとって有益であった。

さて、「三〇〇万人の大学」では、基礎工学部の具体的な学科の一例に生物工学科について述べている。

「基礎工学部の中でもっともユニークな学科は、生物工学科であろう。一九六七年に創設されたこの学科は、『生物的機能を対象にした理学と工学との境界領域を開拓する人材の育成』とその理念をうたっている。教師陣のディシプリンやその扱う研究テーマも多彩で、バイオニクスもあれば生物物理学もある。」このため、学生に、生物工学とは何か、という統一的なイメージが持てない。「しかし、『そのえたいの知れぬところが魅力でとびこんで来た初期の学生には、なかなか個性に富んで面白い奴がいた』とある教師は回想する。」

懐徳堂の鵺学問が大阪大学の源流だということは再三述べた。多分、そういう懐徳堂を意識しない人が、基礎工学部の学科について「えたいの知れぬところ」と評している。えたいの知れぬということは、正に鵺である。そういう学問をどんどん展開して行くのが、大阪大学の系譜なのである。しかし、鵺といい、えたいの知れぬといっても、それは今日的にいえば学際領域のことである。前にも引用したが「首は朱子で、尾は陸(陸象山)、脚は王(王陽明)」というのは、要するに学問の対象に応じて、諸学を融合させる学際研究で、大阪大学では基礎工学部にそれを新しく実現したのであった。

同様の学際領域として、大学紛争を経た昭和四十七年に他の大学の後を追って教育学部を設ける代りに、人間科学部を創設する。

行動科学、社会学、教育学等を融合した人間科学部的構想は、紛争前から大阪大学にあったときく。しかし、多分文部省の窓口も新しい学部の名称にとまどったであろうし、特に大学設置審議会は新学部にガードが固かったことが想像される。このため阪大側は「社会学部」と名称をかえて計画を練りなおしたという。

ところで、近年の文部省は、外から見られている程因循姑息ではない。大学紛争を経た影響も若干はあろうが、イデオロギーの問題としてではなく、もともと性格的に進取の気性にとみ、或いは発想が革新(イノベイティブ)的な幹部も多い。昭和四十四年から四十六年まで事務次官の立場でこの問題に関与した天城勲氏が、既存の学問領域そのままではなく、経験科学を統合した新しい学際領域をいかに構築するかは重要なことであり、その後のこの学部の発展について評価するとともに今でも、人間学の学際的パイオニアとしてのこの学部の動向について注意を払っ

ている。もう一人は、この学部の創設と整備の時期に当る昭和四十六年より四十九年まで衝に当った、当時の木田宏大学学術局長である。人間科学という用語を、大阪大学の関係者と一緒になってフランス語の類似の表現にその語源を求めたこと。大学設置審議会に説明するために、私立大学の或る大学で学科の名称に人間関係の名を既に使用している例を見付け、先例があるからと意を強くしたこと等、大学学術局長の立場では一大学の一学部の事であるのに、今もこの学部の誕生について、まるで我が事のように語るのである。文部省の次官や局長がその創設と発展に期待をかける程、この新機軸の学部は幸運な環境にある。

考えて見れば、大阪大学は、国家須要に応じる人材を育成する帝国大学としては、もっともそれらしからぬ大学として発展してきた。いわば帝国大学の異端児であった。それは、創設の時からもそうであった。前に、昭和六年、大阪帝国大学発足時に、寄附金援助を地元公共団体等に依存しすぎることが問題になって、貴族院で会期延長までする程多難であったことにふれた。大体に近畿地区にもう一つの帝国大学を設けることは、政府として反対であったことは想像にかたくない。

帝国議会における予算審議の難産ぶりは、阿部彰氏「大阪帝国大学創設過程に関する覚え書」(『大阪大学史紀要』第二号)に詳しい。衆議院でも、鳩山一郎らの政友会で大阪帝国大学の当該予算の全面削除を要求する修正動議が提出されたり、貴族院では、前述二日延長の上附帯決議を付せられ、政府の教育諮問機関である文教審議会に対し、諮問手続を先行させるという極めて異例の手続になったという。この十年間、文部省で数多くの大学や学部の創設に関与し、その予算折衝や国会対策等に身を削る苦労の経験を重ねたが、筑波大学の例を除けば大阪帝国大学創設時の話程激しい難産は知らない。

こういう事情を反映して、大阪帝国大学の歴史、沿革に関する多くの冊子は、この大学創設期の苦悩のドラマを語っている。しかも苦労して生れたこの大学は、旧帝大の権威を破る現実主義で人の意表をついてきた。しかし、そういう異端を続けているうちに、いつのまにか社会や時代の進展を先取りし、文部省の関係者からも高く評価される地位を確保していたといえる。鵺学問は決してえたいの知れないものではなく、実はこれからの二十一世紀に生きる学問であったともいえる。

大体、我が国の正統派といわれる大学の指向には問題がある。理論化され、体系化された既成のディシプリンに固執することが本来の学問であると考えられがちである。このような大学の傾向が生じる根は深い。明治以降の百年間、近代西洋社会をモデルケースとして、それに見倣う事だけがわが国社会の進歩発展の原動力となってきたという歴史が、わが国社会の基底を決定してきた。こういう事情を背景として、凡そ諸科学にわたる学術研究が追い付きと模倣におわったのも、客観的に見ればやむを得ない現実であるかも知れない。そして、欧米のどこかで、それぞれの社会や自然の諸現象を基盤に抽象化し、体系化してきた学説、理論や分析手法をそのまま移入して披露することだけでおわる傾向が強かった。しかし、教育、研究の対象は複雑で流動的である。大学の学部その他の組織の専門領域が、いつまでも大学設

置基準に定められている既成の専門領域だけで対応出来るものでない。

ここで、個々の教官の研究領域が特定の専門分野に属してそれを深化して行くことを否定しているのではない。又、拠るべきディシプリンもない無原則の学際領域を賞揚しているのでもない。組織としての大学が従来の既成の領域だけに固執し、又は安住する事を問題にしているのである。学問は、それ自体の発展法則をもっている事実は否定できない。しかし所詮は、現実との対応で展開すべきものである。現実を踏まえた実践性をたえず検証しながら教育、研究の新しい領域はきりひらかれる。適塾にとって、蘭学は蘭学としてあったのではなく、西洋文明の導入という現実的効用に即して研究されたのであり、洪庵にとって医師の戒めを明らかにし、コレラや天然痘の防疫を行うという現実目的のために医学はあったのである。懐徳堂が儒学その他の学問を研究、教育したのも、大阪町人の現実の社会生活に活用する道を求め、商家の経営理念の樹立とその実践のために行われたのである。

そして、凡そ世界の大学の起源ともいわれる学問領域が医学、法学、神学である事を見ても、それらは純粋科学ではない。人を治療し、社会の秩序を維持し又は宗教活動の理論化を図るという、現実に即した応用的なものである。今日、長い歴史を経たためオーソドックスな体系をもっているように思われがちであるが、その学問領域は、雑然とし混沌とした現実と悪戦苦闘しながら少しずつ発展してきたに違いない。

前にもふれた中世大学の起源が抽象的な正統派学問のためでなく、具体的な現実目的の解決のため発生した事情は皇至道『大学制度の研究』で具体的に見ても明らかである。

ボロニアの法学研究の起源は北部イタリアのこの地に都市が勃興し、中世の二大勢力である教会と国家から自治権を獲得しようとして、ローマ法の研究の気運がかもし出されたことによるという。都市が自らの権利を確保しようという現実がボロニアの大学の法学を支えたのである。パリの神学大学は、元来教区内の世俗僧の養成を目的とし、僧正、大僧上を育てるためのものであった。要するに後進を育てるという目的的な本山学校なのであった。イタリア半島の南部、サレルノになにゆえ医学の研究が起ったかということに関しては、その地方が療養に適する健康地帯であり、かつ附近によい鉱泉のあることが多くの人々によって指摘されているという。これら大学の起源の学問の状況は、その体系化を見る前は、現実の課題に対処するための諸学の混在するえたいの知れない鵺学問であったにちがいない。

わが国の大学が、既成の伝統的な学問、研究だけが本来であると考えるならば、それは輸入学、翻訳学を中心としたわが国の、わずかこの百年の歴史的な状況からくる特殊な現象であるといえよう。むしろ、現実に即して新しい領域を求めて行く創造的な大阪大学の思想と行動の方が、大学の発展法則の正統であるかもしれない。そのような傾向が今日の文教行政で評価されるのは、理由なしとしないのである。

基礎工学部も、人間科学部も、その卒業生の社会的評価も定着してきているときいている。

さて、伝統を破り、時代の先端をきりひらいて行く大阪大学の事績は、仔細に述べればつきない。紙数にいとまがないので、最後に昭和

四十二年に創設された医療技術短大についてふれる。これも旧帝大としては思いきったプロジェクトで、その意義はまことに大きい。その意義を列挙してみれば次のようである。

(1)一段低い技術者として、その養成を各種学校・専修学校に位置付けられていた看護婦、医療技術者教育機関をいわゆる一条学校にひきあげたこと。

(2)旧帝大はもとより、国立大学でも初めての試みであること。

(3)急速に複雑、高度化するパラメディカル―コーメディカルの関係者養成の水準向上に即し、現代医学の発展の趨勢を先取りしたこと。

大阪大学に先鞭をつけられ、その後各国立大学でも、医療技術短大の創設は糸をひくように続いている。同じ国立大学の中でも、早々と大学教育の機会に浴した大阪大学医療技術関係者は幸せというべきであろう。東京大学医学部附属看護学校では、遂に今日に至るまで短大昇格は話題にもなっていない。又厚生省所管の各種の養成施設も、専修学校のままであり、今日、短大になりえないことが大きな問題として残っている。

発展の指数――規模の拡大

文部省で仕事をしていると、大学の気風や、付き合いのある教官の性格に顕著な傾向がある。

旧制高校において、「一九〇七年(明治四十年)前後までに、既設のナンバー校に於ては、一高の『自治』、二高の『雄大剛建』、三高の『自由』、四高の『超然』、五高の『剛毅朴訥』等の標語に代表される積極的で個性の強い校風の型が成長していたのが実際である。」という指摘がある。(高橋佐門「旧制高等学校における校風」国立教育研究所紀要第九五集)

これらの高等学校をひきついだ今日の各大学にひきなおしてみても、手を打ちたい程、その特徴を表して実感が出ている。別の角度から今日の大学をみれば、例えば東京大学は、その歴史や或いは政府審議会の委員等が多いこと等もあって、体制的権威主義であるし、京都大学は、東京批判的な土地柄も反映しながら、反権力的権威主義である。大阪大学の教官の場合は、仕事の話をしていても、やはり何か商人と話をしているように思える。如才はなく、建前にこだわらずそして才知にたけている。この方が大学の先生なのかと思わせながら、いつのまにか主張を通して行く。

文部省等では、個々の教官とのかけひきで政策や予算を決めて行くのでなく、基本的には組織としての要求を、担当課で原案としてまとめ、局議、省議ともちあげ、予算に関するものは大蔵省に概算要求として出して行く。大きな政策決定の機序の中できまって行くので、予算の採配に個人的な感情の入る余地はない。しかし、教官の個人的な対応が、全体としての大学の動向に影響を与えて行くようである。そして、前述のように、過去の経緯や建前にこだわらず、数々の新機軸、新構想を樹てて行くため、他に比べ拡充、発展が著しい。

歯学部の創設のように、かりに政府で財政的に不如意のところを強引に実現させてしまい、当初整備の欠陥が残ったような場合でも、一

旦組織が出来上ると、既成事実として、予算や定員措置或いは施設、設備の整備がなされて行く。共同利用の研究所や学際領域の人間科学部のように、政府の政策や時代を先取りしたような場合には、更に積極的な整備拡充がはかられる。

そのような、大学の組織的な動きが重なって、戦後の大阪大学は顕著に成長してきた。発展の指数を関係大学の要覧から作成したのが表である。たとえば表1にあるが、学生数は昭和三十年で八六〇人が五十七年で二、一一五人になっている。旧六帝大の伸率はこの間一・五九倍であるのに対し二・四六倍である。基数が小さかったから倍率が大きいのは当然としても、表で明らかなように絶対数としても相当な伸率となっている。

他方、財政規模の推移を見てもその傾向は変らない。表2にあるように、昭和四十年度で歳出決算は七九億円であったが、五十五年度に四九九億円で六・三六倍になっている。旧六帝大の平均は五・七一倍である。（金額一千万円で四捨五入）

表1　旧七帝大入学定員の推移　（　）は指数

年度	昭和30年度	40年度	50年度	57年度
	人	人	人	人
大　阪	860 (100)	1,635 (190)	2,115 (246)	2,115 (246)
北海道	1,132	1,758	2,120	2,195
東　北	1,864	1,874	2,164	2,214
東　京	2,092	2,831	3,063	3,063
名古屋	840	1,405	1,660	1,660
京　都	1,580	2,240	2,506	2,526
九　州	1,180	1,730	2,050	2,150
六大学 (平均)	1,448 (100)	1,973 (136)	2,261 (156)	2,301 (159)

表2　旧七帝大決算額の推移　（　）は指数

年度	昭和40年度	50年度	55年度
大阪	億円 79 (100)	億円 261 (333)	億円 499 (636)
北海道	66	260	426
東　北	90	315	466
東　京	176	599	948
名古屋	61	225	369
京　都	94	346	537
九　州	69	261	434
六大学 (平均)	93 (100)	334 (360)	530 (570)

× × × ×

さて、これらの発展の指数にも明らかであるが、今までは大阪大学は活力にあふれて成長してきた。まだ発展の余力ももっている。しかし、この稿の最後にあえて二つの事に触れたい。

一つは、卒直にみて、これら種々の新しい試みが果して所期の成果をあげているかどうかということである。発想だけで具体化が伴わなかったり、折角学際領域だといいながら、区々の専門家の集合に過ぎず、ディシプリンの交換による研究の発酵を伴わなかったりしているところはないだろうか。或いは新機軸の組織だといいながら、個々の講座や部門にまでたち入ってみると従来型のテーマや研究方法を指向したり、又、折角活力にあふれる産業都市を背景にもちながらそれを研究フィールドとすることもなく、研究室に閉じこもった従来型のままということがないだろうか。危惧の念

に過ぎなければ幸いである。

もう一つの問題は教育上の配慮の問題である。具体的にいえば、例えば入学者選抜の改善工夫等である。推せん入学の実施、面接、実技その他二次試験の多角的な工夫等、既成の入試では求めえない独創的な受験生を選ぶ努力はもっとあってしかるべきではなかろうか。更に又、社会人入学を試みるとか、公開講座を大規模に行うとか、昼夜開講制の課程を設けるとか、大学と社会の接点のところで新しい構想を導入し、教育上も旧帝大らしからぬ発展を是非望みたい。留学生の数や他大学又は外国の大学との単位の互換等もまだ少ない。

門外漢の口はばったい評価は、さしひかえるべきであるが、大学に対するわが国社会の評価は意外にきびしく、その評価に応える大学側の努力がなおざりにされた瞬間に、大学の発展はとまるといって過言でない。

過去の成長の軌跡の今後への一層の発展を祈りたい。

（さいとう　たいじゅん　文部省大学局審議官）

大阪大学史紀要　第1号目次

大阪大学創立50年を迎えて…山村雄一／大阪大学史紀要創刊にあたって…中馬一郎

〔論文〕大阪における法学教育事始…熊谷開作／大阪における商業・経済教育事始…宮本又次／大阪における財界と学問…黒田孝郎／大坂舎密局史…芝哲夫

〔研究ノート〕「総長」の呼称について…水野克彦／近世大阪町人学の系譜と特質―懐徳堂学の再興―…作道洋太郎／大坂府仮病院の創設(一)…松田武

〔座談会〕大阪帝国大学の創立と法文学部の創設／大阪大学工学部の戦後史

〔日記〕敗戦前後の日記……井本稔　〔回想〕ラポルテ教授の友情……田中晋輔／「栂ノ木寮」建設あれこれ…紙野桂人

三十周年を迎えた大阪大学万葉旅行会　〔資料紹介〕エルメレンスの寓居

大阪大学史紀要　第2号目次

〔論文〕大阪帝国大学創設に関する覚え書き―文政審議会における審議を中心に―…阿部彰／山口玄洞のことどもと公共奉仕…宮本又次／大阪大学の道程―大阪大学略史―…三谷裕康

〔研究ノート〕大阪府仮病院の創設(二)…松田武

〔座談会〕法文学部の創立と文学部／法学部の今昔をめぐる／産業科学研究所四十年の歩み

1、2号ご希望のかたは希望の号数を明記の上、左記編集室までお申し込みください。（送料　1冊250円）

豊中市待兼山町1―1　大阪大学附属図書館内
大阪大学五十年史資料・編集室